

三井物産環境基金～未来につながる社会をつくる～

2014 年度研究助成の総評

案件選定委員会

三井物産環境基金は、2014 年度から「未来につながる社会をつくる」ことを助成プログラムが目指すべき主要な命題として位置づけ、人間存在の場としての「地球環境」、その中で人間活動である「資源循環」、それによってもたらされる「生態系との共生社会」、そしてその全体を健全に持続させるための「人間および社会のつながり」という 4 つの課題領域を対象として設定することにしました。

環境資源制約が明白になってきた現在において、賢い資源利用により人類の Well-being 向上を確保するには、正しい科学的知見に基づいた環境保全活動を世界の人々に広げる必要があります。本研究助成は、現在人類が直面する重要課題の解決を目指した社会と科学の接点を有する複数分野横断的な総合研究の視点を重視してなされます。

本年度研究助成には 161 件の応募があり、上記観点からの審査の結果 8 件が採択されました。3 件は東日本大震災発生に対応し緊急に立ち上げた復興案件研究助成のもとで行われた、干潟生態系変化、長期避難者などモニタリングの継続案件で、初動からの貴重なデータの蓄積による今後の対策への提言が期待されます。放射能汚染地域に入り込んで農家と確実な活動を続けている、5 大学共同での農業復興にも助成します。

今回は、日本各地でおこっているヒグマ、サル、シカ、イノシシ等獣害と棲み分けに関する提案が多くありましたが、温暖化による食物連鎖影響も考慮したヒグマの生態研究が選ばれました。IPCC の最新報告では今世紀末には森林土壌海洋といった生態系の炭素吸収・エネルギー機能利用が必須となりますが、採択されたアジアでの森林保全研究はそのための仕組みづくりである REDD+ を念頭に進める例としています。アジア諸国との共同研究も本基金では重要視しており、インドネシアでの環境教育効果測定研究と小ぶりではありますが、日中間協力を生物多様性保全法体制比較で進める試みも採択されました。

対象とするのが次世代にわたる課題であることを考え、長期を見据え、大胆、斬新なアイデアと地に足が着いた行動で挑戦する若手研究者の育成を本研究助成は大切にしています。今回、外来植物が在来訪花昆虫の繁殖に与える影響の研究が一件選ばれましたが、いくつかの提案は、カギとなる科学知見・技術や大きな構想が 10 年程度のタイムスパンでどのように社会へインパクトを与えるものになるのかの道筋形成が十分に練られていない傾向がありました。ぜひ再挑戦してください。

今回、冒頭に書いたように助成課題領域概念を組みなおしたことから応募される方々に戸惑いがあったのか、審査側の意図する社会的課題をとらえた、問題解決・専門分野横断

総合枠組みでの提案数が必ずしも十分ではありませんでした。一見問題解決的タイトルと研究内容の明らかな乖離がみられる提案もいくつか見られました。具体的な研究設計記述がないもの、システムとしての対象把握不足、出口不明の海外調査、明らかに過大とみられる予算計上等も基金の方針には合いません。

今後基金側は、「未来につながる社会をつくる」ことを目指し、研究者の方々との理念共有のための努力を様々な形で続けてゆく所存です。社会における科学者の責任を踏まえ、科学の力を存分に発揮する exciting な研究提案を待っています。